

特集

息栖大橋 ストーリー

人とまちと

時をつなぐ架け橋



私たちは口頃、ごく当たり前に橋を渡って移動をしています。今回は、まだ息栖大橋がなかった時代や、開通した当時の様子を知る皆さんに話を聞きました。1本の橋によって暮らしやまちがどれほど変わっていったのでしょうか？身近な橋に秘められたストーリーを追いかけます。

農業も船に乗って

水と共に歩み、発展してきた神栖市。歴史をさかのぼると、江戸時代の利根川は人や物資を運ぶ「水上の道」として重要な役割を果たしていました。特に息栖河岸は、明治から大正にかけて高瀬舟、外輪蒸気船、遊覧船などが行き交い、地域の玄関口として賑わいました。昭和に入ると渡船が就航し、日常生活を送る上で対岸との結びつきが強くなりました。渡船での往来が盛んになっていきます。

息栖の渡船場を間近に見ながら育った猿田善一さんは、昔は常陸利根川をさまざまな船が行き交っていたと教えてくれました。「中洲に水田が広がっていたので、船を持っている農家さんが多かったんです。



猿田さん

うちでも、船に農業資材や農機具、時には牛を乗せて中洲に渡ったと母から聞いています。魚やシジミも豊富なので、小型漁船で漁業もしていました。浅瀬や藻が多いところでは、竿で漕ぐ「ちゃんこ舟」で漁をする人もいましたね」

猿田さんは、子どもの頃からよく渡船に乗っていたと言います。「小学3、4年生の頃には一人で乗ることもありました。渡船場の人も船長さんも乗客もみんな顔見知りで、家族的な雰囲気でしたね。唯一心配だったのは、乗り遅れてしまうこと。帰りは最終便の1本前の

便に、駆け足で乗り込んだものです。中学生の頃に息栖大橋ができると聞いてとてもうれしく思う反面、渡船の廃止はやはり寂しく、本数を減らしてでも残してほしいという気持ちもありました」

三代夫婦の渡り初め

昭和40年代は鹿島開発が進んで、まちが一気に発展した時期です。昭和44（1969）年に鹿島港が開港、昭和45（1970）年に神栖町が誕生、そして昭和48（1973）年に待望の息栖大橋（常陸利根川）が開通しました。橋長375メートル、幅員6.5メートル、中洲の取付道路を経て小見川大橋（利根川）につながり、全長は約1.5キロメートルとなります。

8月1日の開通式では、三世代家族で参加の「三代夫婦」を先頭に鼓笛隊や招待者が渡り初めをおこない、橋の中央でテーパカットや花束交換などのセレモニーが晴れやかに挙行されました。三代夫婦として参加した大槻邦夫さん・



大槻さん夫妻

息栖大橋は、鹿島臨海工業地帯への通勤をはじめ、通学や東京との物流を支える大動脈となりました。片岡光枝さんは、ちょうど橋が開通した年に新任教師として神栖高校に赴任し、変わりゆくまちの様子を見ました。「私が赴任したのはまちが日々変化していく時期で、鹿島セントラルビルが完成したばかりのころです。

まちも暮らしも一気に変わる



- ① 橋長375メートルの息栖大橋。中洲を経て小見川大橋と合わせると全長約1.5キロメートルになる
- ② 息栖大橋開通式（昭和48年8月1日）
- ③ 「三代夫婦」として渡り初めに参加した大槻家
- ④ 息栖と小見川をつなぐ渡船
- ⑤ 完成前の息栖大橋と渡船